

未来について考えさせられた1年

今年にはコロナ禍の豪雨災害など複数のイベントリスクが現実となり、日本の未来について考え続けた1年になりました。コロナ禍、「密」を避けるテレワークやオンライン授業が導入されどこにいても仕事や学習が出来ることを実感、人々の往来が減少しました。同時に、社会生活に必要な不可欠な仕事をしているエッセンシャルワーカーの存在や待遇が低いことが再認識されました。テレワークを通じてジョブ型雇用がクローズアップされ終身雇用の見直しや副業を解禁する動きが出てきました。

日本工学アカデミー会長の小林喜光氏はコロナ禍の現状を『茹でガエル』の前に蛇が現れ社会を大きく変えようとしていると表現しています。失われた30年、資源が少なく少子高齢化が続く日本は新たな産業の芽を育てないと未来はないと誰もが感じていたはずで、政府はこれまでAIやIoTの進展にも関わらず「はんこ行政」を続けてきましたが、今回デジタル化の推進へ一気に舵を切り、2050年に温室効果ガスの排出を実質ゼロにする目標も打ち出しました。コロナ禍が時の流れを加速し「日本の未来」という現実を突きつけたからです。小林さんは現状を打破するにはクロスボーダーの考えが重要で国や学問領域は勿論、産・学・官を越えた共創、協働が必要とも訴えておられます。

このことは「モノ(物質)」から「コト(情報)」へ、「作り手」から「使い手」へ、「勘」から「データ」へといった二項で発想する時代から社会性や公益性、環境にやさしいかなど第3軸となる新たな視点を入れた対話から生まれる「人間の快適さを実現する価値」が評価される時代を予感させます。例えば医療で言うとエビデンスに基づいたお医者さんの処方箋に患者の感じ方や思いも加えて新たな治療法を創造するイメージです。

ポストコロナ時代にはAI対応の「データ」と持続可能を意識する「教養」の複眼思考に加え対話を通じて人の思いが分かる人材が必要になることに気づいた1年でした。

お正月に読んで欲しい本：「コロナ後の世界を生きる—私たちの提言」村上洋一郎編(岩波新書)。各界の専門家がいろいろな視点で語っています。興味あるところを見つけ掘り下げて考えてみましょう。

「不要不急」から見えたもの

明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしく願い致します。今年のお正月は「不要不急の外出自粛」を守り、初詣にも行かず家で過ごしました。テレビで帰省する人が減り空港や駅が閑散としている様子が取り上げられる一方、飲食店や交通事業者、観光業者の事業継続が出来ないという悲鳴も報道されました。不要不急な外出を少し自粛しただけで経済が回らなくなる現代社会の実態が明らかになりました。

佐伯啓思京大名誉教授は朝日新聞(2020/12/26)の異論のススメで「人を動物から区別するのは、ただ生存のための食糧の確保ではなく、『文化』という無駄なものを生み出し、そのために過剰なエネルギーを投入する点にこそある。～今日、芸術も、科学も、エンターテインメントもすべて同じ経済原理の下に置かれてしまった。『不要不急』と『必要』は地続きになってしまい、あらゆる種類の『文化』が『経済』に従属することになった。」また、不要不急を考える中で「『必要なもの』と『不必要なもの』の間に『大事なもの』があることを知った。」と語り、大事なものは「信頼できる人間関係、安心できる場所、地域の生活空間、なじみの店、医療や介護の体制、公共交通、大切な書物や音楽、安心できる街路、四季の風景、澄んだ大気、大切な思い出。これらは市場で取引され、利潤原理で評価できるものではない」とも述べています。

この論説を読んで、大事なものを見逃していたのは人間の本能で、脳の負担が少ない「二者択一思考」をすることが関係していると感じました。不要不急なことも損か得かだけで考え、白黒を判断していた現実です。

コロナ禍で頻出した「不要不急」という言葉は、成長し続けることが「善」ではないという当たり前のことを思い出させ、物事を経済的側面のみならずSDGsなど多面的に見て、大事なものを見失わない判断をすることがいかに大切かを改めて教えてくれました。